

# L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

FREEPAPER 第2号 2013年4月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

巻頭特集 ● 仕掛けと概念を巡る国際研究集会  
生活 ● P. ボナン教授 寄稿  
都市 ● エリゼ宮 文化遺産の日  
文化 ● ラルデレロ地熱発電所  
企業 ● 曙ブレーキ工業株式会社  
食 ● ガレット・デ・ロワ

Special

Vie

Urban

Culture

Industrie

Cuisine

L' Echange

巻頭  
特集

第 2 号

## La spatialité japonaise 仕掛けと概念を巡る国際研究集会

日仏の空間語彙

2012年5月に、京都において、「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論をめぐる国際研究集会」が開催されました。今回の巻頭特集では、日本の空間についての熱い議論の様子をレポートします。

### — 国際研究集会の概要

2012年5月10日（木）から13日（土）にかけて、京都において日仏の空間語彙をめぐる一連の国際研究集会が開催されました。これは、フランス人研究者による日本の空間研究に関するネットワークであるフランス文化省日仏交流ネットワーク[JAPARCHI(ジャパルシ)]が、2008年以降、日仏の共同研究『仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論 Dispositifs et notions des spatialités et temporalités françaises et japonaises』として進めてきた知的成果の集大成でした。本研究は、日仏の比較を基軸におき、空間を構成する仕掛けや道具立てに関する分析を行うことを目的としております。共同研究最終年度の2011年度は、研究の総仕上げとして、JAPARCHI 代表であるフランス国立科学研究センターのフィリップ・ボナン(Philippe BONNIN) 教授を中心に、京都という日本の空間の「現場」を舞台に、日仏両国の研究者による討論が進められました(※)。その成果は、最終的に空間と建築について→日仏双方の分析視角を踏まえながら、日本の建築空間についてフランスの視点から検討した語彙集『Vocabulaire encyclopédique de la spatialité japonaise (日本の空間性に関する百科事典)』として編纂されることになっています。



写真：関西日仏学館外観

建物は、オーギュスト・ペレの弟子のレイモンド・メストラレと大阪の建築家木子七郎による設計。2003年に芝浦工業大学・赤堀忍教授(当会常務理事)の設計により保全された。国登録有形文化財。

写真：関西日仏学館における議論

※ボナン教授による JAPARCHI の研究プロジェクトを、2011年度に国際日本文化研究センター(日文研)が共同研究として採用したものである。



### 一 関西日仏学館における議論

5月10日(木)14時から18時には、関西日仏学館において、関西日仏学館とJAPARCHIの主催による講演会「空間の言語：四人の雄弁家 (Le langage de l'espace : quatre orateurs)」が行われ、京都工芸繊維大学・西田雅嗣教授及びボナン教授の司会により、日本の空間の可塑性・時間性、また日本の空間文化における「間」にあり方について、活発な議論が展開されました。講演は下記の通りです。

- ・加藤邦男氏(京都大学名誉教授)「Problématique de la spatialité dans l'anthropologie japonaise (日本の人類学における空間性の問題)」
- ・フランス国立社会科学高等研究院・オギュスタン・ベルク教授(Augustin BERQUE)「Aida et ma : des objets aux choses (間(あいだ)と間(ま):物(もの)から事(こと)へ)」
- ・藤女子大学・三宅理一教授「Espace temporaire ou espace de secours (仮設の空間または緊急の空間)」。

なお、「Quelques avatars de la spatialité (空間性のいくらかの変化)」が予定されていた奥羽大学・ジャック・プゼー＝マサビュオー(Jacques PEZEU-MASSABUAU)元教授は、残念ながらご欠席でした。



### 一 日文研での国際集会和京都散策

5月11日(金)・12日(土)は、日文研において国際研究集会が開催され、小講演の他、各研究者が担当の項目について発表と議論を行いました。小講演については下記の通りです。

- ・フランス国立科学研究センター・ニコラ・フィエヴェ(Nicolas FIEVE)教授「Célébrations et représentations des saisons dans les jardins de l'époque de Heian (平安時代の庭園における季節の祭りと表現)」
- ・九州大学・土居義岳教授「Sur la notion d'espace Public Space ou de Sphère Publique (パブリック・スペースまたはスフェア・ピュブリックの空間の概念について)。(以上2講演が11日)」
- ・日文研・稲賀繁美教授「Les temps de la spatialité japonaise (日本の空間性における時間)」
- ・早稲田大学・シルヴィー・ブロッソー(Sylvie BROSSEAU)教授「Construction du territoire et imaginaire, à propos de la notion de meisho (名所の概念による領域と創造の構築)。(以上2講演が12日)」

これらの講演と各項目に関する議論では、改めて日仏の文化的な背景の相違を感じ、お互いに積極的に理解を深め、反映させることができました。例えば、私(江口)は「まちづくり」の歴史や概念について発表しましたが、単に活動の説明をただけでは意味が伝わらなかった為、「協議(Concertation)」という日仏における概念の違いから説明した方が、フランス人に分かりやすいというコメントをいただきました。

13日(土)は西田教授のご案内で、西本願寺と島原の遊郭・角屋の見学をしました。特別のお計らいで、西本願寺では飛雲閣の一階の書院・招賢殿、角屋では館長のご案内により二階の広間も見学することができました。土居教授から、飛雲閣は磯崎新の「建築における『日本的なるもの』」で指摘され、当時の建築家の間にブームを起こしたというお話を伺いました。角屋二階には新撰組がつけた柱の刀傷も残っており、大変貴重な見学をさせていただくことができました。

最後に、この試みはグローバル化の時代におけるアイデンティティ確立のため、二国の空間文化を相対化していく上で、非常に重要な試みであるということが出来るでしょう。特にそれは、日仏の研究者が議論を深めながら、お互いの言語や文化をそれぞれの言語で解釈する点に、単純な技術の輸入を超えた、これからの日仏の技術交流のあり方が見えてくるのではないのでしょうか。

(文責：江口久美)

写真：

- 左：稲賀教授による小講演
- 中：日仏研究者による白熱した議論
- 右：西本願寺での見学

L'ECHANGE

生活

VIE

## フィリップ・ボナン

フランス政府公認建築家。エコール・デ・ボザール修了。人類学者。CNRS 研究ディレクター、AUS（建築・都市計画・社会）研究所所長、UMR（大学との共同研究室）7218 CNRS-P8-P10(CNRS 内での部門)。日仏研究ネットワーク JAPARCHI 創設者。JAPARCHI は、国際日本文化研究センターで共同研究を行っている「日本の空間語彙」プロジェクトの編集作業を行っている。日仏の空間比較に関する研究（境界・仕掛け・宗教建築、大衆建築における居住と時間の進化、都市の一般的美学、居住空間の観察と分析における画像の利用、都市計画の形態発生学）を行っている。

写真：(ボナン教授提供)

左上：国際集会打ち上げにて

左中：被災地訪問

左下：国際集会メンバーと

右上：教授近影

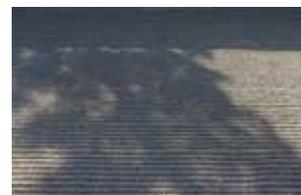
右中下：枯山水庭園にて

寄稿

## 京都での研究生活

フィリップ・ボナン教授

昨年一年、国際日本文化研究センターに滞在し、日本の空間文化に関する語彙辞典のフランスでの出版を目標とした日仏共同研究で、日仏の共同研究者達との数多くのワークショップやシンポジウムや議論、日本人との多くの事務的仕事等の豊かな体験・成果に恵まれた。これら貴重な経験を通して痛切に感じた事が一つある。日本の事についてのフランス人の発表や論考や書物の多くがフランス人を相手に、フランスの方法を、事の当否や日本人の興味とは無関係に適応する。対して日本人は、親切にも日本人はその日本の事についてこう考えていると、我々とは全く異なる考えを示してくれるが、フランス人にはその重要性や意味が理解できない。肝要なのは、事の真偽ではなく、日本についての言説で言うなら、フランス人のフランス人に向けての言説、日本人のフランス人に向けての言説、フランス人の日本人に向けての言説、日本人の日本人に向けての言説の、各々の違いと意味を認め、こうした違いを包含できる寛容性を持った高次の考えを持つ事ではないか。日本の空間文化に関する語彙辞典の出版は、出版前の日仏間の様々な作業、議論こそが重要なのだ。



※本稿は、ボナン教授の日本語による寄稿を、そのまま掲載したものである。

Special

Vie

Urban

Culture

Industrie

Cuisine

パリ  
PARIS



エリゼ宮  
PALAIS DE  
L'ÉLYSÉE

**毎年9月の週末に行われる「文化遺産の日」。当日は、普段は立ち入ることのできない行政施設も市民に門戸を開く。2012年の「文化遺産の日」(9月15-16日)、L'Echange編集部は、フランス大統領官邸であるエリゼ宮を訪問した。**

シャンゼリゼ通りのすぐ近くに位置するエリゼ宮は、現在、フランス共和国の大統領官邸として使用されている。1722年に建築家のモレによってエヴルー伯のために建てられた後、エリゼ宮の所有者は次々と変わり、ルイ15世やルイ16世、ナポレオン1世などフランス政治における中心人物が住居として使用した。公式にエリゼ宮が大統領官邸として使用され始めたのは1874年のことであり、それ以降、歴代のフランス大統領によって数々の政治的な決定がエリゼ宮で下されてきた。

エリゼ宮は、政治的重要性のみならず近年、重要な建造物としても注目を浴びている。何故なら、エリゼ宮の内部は、「文化遺産の日(journée du patrimoine)」にのみ一般公開されているからだ。文化遺産の日は、フランス全土で毎年9月の週末に開催されているイベントで、当日は「文化遺産の修復や保護をより多くの人々に知らせたい」という目的のもと、全土で1万件を超える文化遺産が無料で公開される。パリ市内では、サン・マルタン運河やポンピドゥーセンター、フランス国立図書館等が無料公開されるほか、上院やエリゼ宮などの立法施設も特別に一般公開される。

PARIS パリ  
エリゼ宮 PALAIS DE L'ÉLYSÉE  
「文化遺産の日」

さて、「文化遺産の日」当日は、開園時刻の朝8時にエリゼ宮に到着しても入場までに4-5時間待つ程の人気であった。敷地内に入ってすぐ、広い庭の向こうにあるエリゼ宮が目に入る。建物内でとりわけ華やかだった部屋は、祝宴の間(Salle des Fêtes)であった。赤を基調にした宴会場では、シャンデリア等の家具だけでなくテーブルの上に並べられた食器までもがこだわり抜かれたものであった。一方、オランド現フランス大統領の執務室(Salon Dové)には、エリゼ宮がフランス政治の中心舞台であることが伝わってくるような臨場感があった。

エリゼ宮を訪れて、フランスでは“文化”が担う政治的な役割の大きさを感じた。文化遺産であるエリゼ宮の維持は、エリゼ宮に直接仕える職人とともに各省庁から派遣される役人によって行われる。「文化遺産の日」当日も、彼らは各部屋に配置され、世界各国からエリゼ宮を見学に来た人々の様々な質問に答えていた。フランスの文化を広く多くの人に伝えることはフランスの魅力伝えることであり、それはフランスにとって政策的に重要であるというフランスの考え方が表れていると感じた。

(文責・飯濱玲香)



フランス人技術者ド・ラルドレルによる発明

# ラルデレロ地熱発電所

イタリア生まれの世界初の地熱発電所

電力、そして再生可能エネルギーを巡る議論が活発化する中、地熱発電への期待が高まっています。火山国であり地震国でもある日本ならでの純国産エネルギーとして、固定買取制度など政策的支援も近年徐々に強化されています。一方、世界初の地熱発電所の誕生に、フランス人の技術者が非常に大きな役割を果たしたことは、よく知られていません。

今回、L'Echange 編集部は、世界初の地熱発電所、イタリア・トスカーナ地方のラルデレロ発電所を見学しました。

## — 地熱発電の仕組み

地熱発電は、地中の熱エネルギーを電気エネルギーに変換する発電方式です。地下深くのマグマで熱せられた高温高圧状態の水分を蒸気として取り出し、蒸気タービンを回転させ発電機を回します。ほとんどの火力発電や、現行のすべての原子力発電は、発生させた熱でボイラーを沸かし、その水蒸気で蒸気タービンを回しており、地熱発電と同様の仕組みであるということが言えます。地熱発電の場合は、地下のマグマの無尽蔵な熱をボイラーの熱源として利用していると考えるとわかりやすいかと思います。

地熱発電は、適切に利用すれば枯渇しない永続的な再生可能エネルギーであること、化石燃料を使わないため燃料費が全くかからず、地政学的リスクにも左右されないこと、CO2 排出がほぼゼロであること、などの利点があります。また、再生可能エネルギーの中では珍しく発電量の変動が少ないため、ベース電源(\*)として利用できることも特徴です。



L'ECHANGE

文化

CULTURE

Special

Vie

Urban

Culture

Industrie

Cuisine

※ベース電源…出力変動をあまり行わず、一定量の電気を安定供給する電源のこと。

写真：ラルデレロ地熱発電所の冷却塔

写真：近郊のガス噴出口 fumarole

### — ラルデレロ地熱発電所

ラルデレロはイタリア中部、トスカーナ州ポマランチェに位置しています。フィレンツェから車で2時間、イタリアらしい田園と自然、そして歴史的建造物の同居する風景に、太い煙突のような、変わった形状の建造物が散見されます。これらは、地熱発電に特徴的な冷却塔です。

もともとこの地域は、モンテチェボリと呼ばれていました。その存在は古くから知られており、ダンテの著作にもこの地の記述が出てきます。彼は噴出する高温の蒸気の強烈さや、硫化水素の臭気などを体験して、この地を「悪魔の谷」と名付けました。ダンテの著作にも記述が出てきます。

18世紀後半、フランス人技術者のフランソワ・ド・ラルドレル (François de LARDEREL :1789-1858) は、噴出する蒸気中のホウ酸を抽出するため、化学工業の会社を興しました。この会社が世界最初の地熱発電を生み出したのです。

### — フランソワ・ド・ラルドレル伯爵

ラルドレルは、フランス革命が始まった1789年、フランスのヴィエンヌに生まれました。彼は、10歳の時両親とともにフランスからイタリアのトスカーナ地方に移住し、29歳のときにホウ酸製造の化学会社を起業します。

この頃のイタリア、そしてトスカーナ地方は、政治的にきわめて不安定でした。彼がイタリアに移住して2年後の1801年、トスカーナ大公国はフランスの勢力下におかれ、ナポレオンの傀儡国家エトリリア王国となりますが、彼が化学会社を起業する直前の1814年にはナポレオン失脚により、再び独立国家に戻っています。そのような難しい環境下にもかかわらず、彼は事業を軌道に乗せていきました。

そんな中、一つの危機が訪れます。ホウ酸の精製過程における加熱処理のために、近隣の森林資源をボイラーの燃料として利用していましたが、伐採により枯渇してしまったのです。

そこで彼は地熱に着目し、1827年に地熱蒸気の熱を効率よく集めるプラントを開発しました。燃料を不要とすることで、この危機を乗り越えたのです。また、この時期すでに地熱蒸気を動力源としても活用し、ガスリフトやポンプを動かしていたといわれています。

その後も事業を大きく成長させたラルドレルは、雇用を創出し、また富を積極的に地域へ還元していきました。このことは支配者のトスカーナ大公に大きく評価されました。1837年には伯爵の地位を送られ、1846年にはこの地の名前は、ラルドレルにちなんだ「ラルデレロ」となりました。ラルドレル家は貴族としてこの地に根付き、そして企業家としても世襲し、繁栄をつづけました。

この会社は、1904年に世界で初めて地熱蒸気を利用して発電機を運転させ、1913年には世界最初の地熱発電の商用化に成功しました。この成功事例を皮切りに、世界中で続々と地熱発電の設置が相次ぎ、またその後この地域にも多くの地熱発電所が建設されました。

現在、ラルデレロ地方にある地熱発電所の設備容量は約60万kWです。これは日本全体の地熱発電の設備容量53万kWより多く、世界全体の地熱発電の5.5%を占めています。

地熱発電は、時代の混乱の中で一人のフランス人がイタリアに渡ったことをきっかけとして、様々な制約の中で足元の資源をいかに活用するか、という視点の中で誕生しました。

現在我々も様々な制約に直面していますが、ド・ラルドレルに習い、もっと足元の豊富な資源「地熱」にもっと目を向けていくべきではないでしょうか。

(文責・江口健介、江口久美)

F1のブレーキ分野で活躍する唯一の日本企業

# AKEBONO BRAKE

## 曙ブレーキ工業株式会社

根岸利行氏に聞く

企業紹介では、毎号、フランスと日本の両国に深い関係の深い企業をとりあげ、その活動を紹介していきます。第2回目は、「F1のブレーキ分野で活躍する唯一の日本企業」である曙ブレーキ工業株式会社をとりあげます。

1929年創業の曙ブレーキ工業は、1960年にベンディックス社と技術提携を行い、ディスクブレーキの分野に進出。1986年にはGM社との合弁会社を設立し、北米ビジネス拡大を図ってきました。2009年にはドイツのロバート・ボッシュ社と北米ブレーキビジネスの譲受契約を締結し、現在では、従業員約8000人、売上高約2100億円のうち、ともに海外比率が約6割を占めています。フランスには1985年から進出し、現在2拠点（開発センター／ゴネス、摩擦材工場／アラス）で事業を行なっています。今回は、日本、アメリカだけでなく、ヨーロッパ、中国、東南アジアなどグローバルにグループ企業を展開している曙ブレーキ工業の製品やモノづくりについて、Akebono Europe S.A.SのExecutive Vice President (R&D)の根岸利行氏にお話をうかがいました。

### 一 御社の主な業務内容について簡単に教えてください。

曙ブレーキは、ブレーキ全般の開発・製造を通して、社会に「安全」・「安心」を提供する会社です。自動車だけでなく、二輪車、鉄道車両、産業機械など、幅広い分野で当社のブレーキが採用されています。売上の多くを占めているのが乗用車用のブレーキで、大きく分けるとディスクブレーキとドラムブレーキの2種類があります。当社ではディスクブレーキとドラムブレーキの加工や組立と共に、ディスクブレーキに組みつけられているブレーキパッド、ドラムブレーキに組みつけられているブレーキライニングなどの摩擦材と、マスターシリンダー（ブレーキの踏力を油圧に変える機構）の生産も行なっています。当社の強みは、ディスクブレーキやドラムブレーキという機構部分と摩擦材の両方を開発・製造していることです。軽量化、高剛性、放熱性、そして快適性など、ブレーキに求められるさまざまな性能を機構と摩擦材の両方の面からアプローチしていくことが可能となるためです。そのため、機構部分には多くの工夫が活かされていますし、摩擦材も様々な材料を配合して作られていますので、私たちのノウハウの塊と言えます。納入先には、トヨタ、日産などの日系のカーメーカーに加え、フォルクス・ワーゲン、アウディ、ベンツ、フランスではPSAやルノー、北米ではGM、フォード、クライスラーなど多くの企業が含まれます。鉄道車両用ブレーキについては、在来線だけでなく、日本が世界に誇る新幹線にもブレーキを供給し、約50%のシェアを占めています。加えて、フォークリフトや風力発電機などの産業機械にも事業領域を拡大しています。また、長年培ったブレーキ技術を活かし、加速度センサーやコンバインセンサーなどの提供も行っています。

さらに、自動車レースの世界最高峰であるFormula 1 (F1)のトップチームである「ボダフォン・マクラーレン・メルセデス」にブレーキを供給しています。2007年に供給開始を発表しましたが、それまでの長い歴史の中で、東洋のブレーキメーカーがF1にブレーキ供給を行ったことは一度も無かったと聞いています。当社にとって、F1をはじめとしたレース関係のブレーキ開発を行うことは大変メリットが大きいと感じています。その理由の一つとしては、人材育成があげられます。レース現場における速い開発スピード、非常に高い要求性能への対応、極限のブレーキ使用環境から得られる技術ノウハウなど、エンジニアにとって大変良い経験の場となっています。同時にここで得られる技術ノウハウを量産車用製品の開発に活かすことができます。そういった意味で技術面、エンジニア育成面で大変意義のある活動だと考えています。理由の二つ目としては、ブランドイメージの向上があげられます。供給を発表して以来、「F1のトップチームに製品を供給できるほどの技術力がある会社だ」というイメージを持ってもらえるようになったのではないかと思います。その証拠として、ビジネスの面では、欧州カーメーカーからの引き合いが大変増えましたし、採用面でも、さまざまな国からのインターンシップや入社希望の問合せが急増しました。



根岸利行氏

曙ブレーキ工業(株)入社。入社以来開発に所属し、主に日本のカーメーカー向け乗用車用ブレーキ開発を担当。2000年に先行開発部部長に就任。2002年から高性能ブレーキ開発プロジェクトを担当。2007年から開始したマクラーレンへのF1ブレーキ供給では開発責任者として携わり現在も英国にあるAkebono Advanced Engineering (UK) Ltd.のManaging Directorを務める。一方、2011年よりAkebono Europe S.A.SのExecutive Vice Presidentとして欧州カーメーカー向けのブレーキ開発も担当している。親会社である日本の曙ブレーキ工業(株)の執行役員でもある。

Special

Vie

Urban

Culture

Industrie

Cuisine



上図：Akebono Europe S.A.S.



写真上：ブレーキキャリアとマスターシリンダーを提供している「ボーダフォン マクラーレンメルセデス」チームのF1マシン

※1：ディスクブレーキとドラムブレーキの仕組み

— 御社にとってのフランスでの事業のあり方について教えてください。

当社としては、自動車の発祥の地であるヨーロッパを非常に重要な地域と位置づけ、事業を進めてきました。1985年、パリに営業事務所を設立したのち、1995年に拠点を移し、研究開発センターを併設しました。市場のニーズや路面、気候が日本とは異なるため、ヨーロッパでの事業拡大には現地での開発が不可欠だったからです。1998年にはアラスにブレーキパッドの工場を設立しました。曙ブレーキ工業にとって欧州は今後更に重要な地域になると考えています。

フランスで事業を展開している中で、対仏投資庁や地域からのサポートは心強く、良い関係を築いています。社員の多くは現地の方ですが、フランス人と日本人では考え方や文化が違うので、お互いを理解するにはコミュニケーションが欠かせません。一緒に仕事をしていて、驚かされたり、感心させられたりと、毎日面白いですね。

— ブレーキの分野における日仏関係の状況について教えてください。

曙ブレーキは、1964年からフランスベンディックス社との技術交流を開始し多くのエンジニアを送り込みました。1980年代にはベンディックス社との提携は解消しましたが、この時の技術交流がその後の曙ブレーキの発展に大きく貢献したものと考えております。

— 日仏交流の長所と短所を教えてください。

長所としては、フランスの投資庁からなど、国レベルでのサポートが受けられることです。また、地域レベルでのサポートもあります。在日フランス商工会議所を通じた関係など、良い関係が築かれています。

日仏における興味深い点としては、フランス人と日本人の考え方の相違です。このようなことはグローバルで考えれば日仏に限らずどこの国でもありうることだと思っておりますが、我々としては、短所としてではなく、長所として捉えています。多様な考え方を持つ人材が集ってこそ、組織としての力を発揮し、成長し続けていけると考えています。

— 近年の貿易政策と事業との関連性のあり方について教えてください。

当社では、日本で供給先の現地ニーズを把握することは難しいと考えています。地域によって自動車の使われ方が異なるため、それに応じたブレーキを提供していかなければなりません。このようなことから、現地でニーズを捉え、開発に反映し、現地で調達・生産・供給していく、地産地消の考え方に基づいて事業を進めています。

— 今後の日仏の技術交流の展望についてご意見をください。

フランスには工業大学が多く、同じ地域の研究機関や企業と協力して技術研究を進める動きがあります。在学中から国内や海外の企業で研修を受けさせ、若く優秀なエンジニアを育てることを狙いとしたシステムがありますのでこういった機会を積極的に活用しフランスの優秀なエンジニアが曙ブレーキに興味を持ってもらえたら良いと考えております。

(聞き手：江口久美)



# フランスの新年？

## ガレット・デ・ロワ！

**日** 本のお正月といえば、「明けましておめでとう」であり、おせちやお雑煮である。フランスでは、年が明けると一斉に《Bonne Année》。そして「Galette des rois (ガレット・デ・ロワ)」が華やかに登場する。ガレット・デ・ロワとはエピファニー（公現祭）を祝うフランスの伝統菓子のことである。エピファニーとは、カトリック教会でイエスが神の子だと示されたとされる1月6日の祝日であり、今では1月2日から8日の間にくる日曜日がその日にあたる。ガレット・デ・ロワは、アーモンドクリームをパイ生地で包んだもので、その中に Fèves (フェーブ) と呼ばれる陶器で作られた飾りが入っている。フェーブとは、直訳すると「そら豆」。昔は、そら豆が入っていたが、今は陶器の小さな人形が主流。写真は日本で購入したガレット・デ・ロワで、中央に載っているのがフェーブ、紙でできた王冠も必需品である。切り分けられたケーキの中にフェーブが入っていた人が王様 (rois) になり、一年を幸せに過ごせると言われており、フェーブを当てた人が王冠をかぶる。もともとは1月エピファニーに由来するお菓子だが、1月中であればスーパーやパン屋などに並べられており、ちょっとした集まりの場などにおいても食べられている。

**陶** 器でできたフェーブには、さまざまなモチーフがある。特に多いのは、キリスト教にゆかりのあるイエスやマリアだ。子ども向けのアニメキャラクターなどをかたどったフェーブもある。近年、ガレットは日本でもよく見かけるようになり、2000円から3000円程度で買える。日本ではパンやケーキをかたどったフェーブが多いと感じる。次の新年にぜひ食べてみてはいかかだろうか。

(文責・佐藤鞠)

写真：ガレット・デ・ロワ



# 編集 後記

L' Echange



江口久美 京大・人環  
*Kumi EGUCHI*

やっと第二号が完成しました。今回は長い道のりでしたが、イタリアへの取材等、盛りだくさんの内容をじっくり練ることができたかと思えます。特派員も随時募集していますので、学生さんなど、記事を投稿したい方は、ぜひお気軽にご連絡ください。



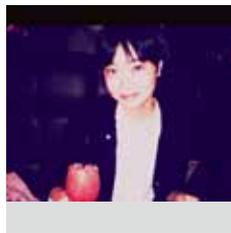
飯濱玲香 某金融機関  
*Reika IIHAMA*

エリゼ宮に入るため朝8時から4時間以上並びましたが、大変見応えがありました。重ねられた長い歴史と政治中心地ならではの臨場感を同時に感じられる場所は、世界でも数少ないと思います。記事を通して少しでもエリゼ宮の雰囲気を感じて頂ければ幸いです。



SS 某民間研究所

社会人1年目が過ぎようとしています。満員電車通勤には徐々に慣れてきましたが、長い学生生活で沁みついた怠惰癖はなかなか抜けそうにありません。2013年は研究でフランス語が必要になりそうで、また一から勉強し直します。



佐藤鞠 上智大学フランス語学科  
*Mari SATO*

今回初めて記事を書きました。L'Echangeの発刊に携われて嬉しいです。大学でフランス語をこれからも一生懸命勉強して、語学だけでなく文化や社会にも精通した人になりたいです。またフランスに関する記事を書いてみなさんに情報を届けられたらと思います。



江口健介 荏原実業(株)経営企画室  
*Kensuke EGUCHI*

ご縁により昨年夏の紀行文を寄稿させていただきました。実はフランスにも現役の地熱発電所があります。本土から遠く離れたカリブ海のフランス領、グアドループ諸島のバステール島。燃料調達・送電が困難な離島で、地熱発電は自給自足・地産地消に最適です。

日仏工業技術会では新規会員を募集しています。趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等問わず歓迎いたします。最終頁または下記HPの「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。

[http://www.sfjti.org/nyukai\\_set.html](http://www.sfjti.org/nyukai_set.html)

お気軽に左記メールか電話でお問い合わせください。

**sfjti**  
**日仏工業技術会**

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】  
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内  
Tel 03-5424-1146 Fax 03-5424-1147  
E-mail: sfjti@t3.rim.or.jp  
HP: <http://www.sfjti.org/>



【交通アクセス】  
JR 山手線：恵比寿駅東口下車 恵比寿ガーデンプレイス方面へ 徒歩 10分  
営団地下鉄・日比谷線：恵比寿駅1番出口 アトレ・JR 恵比寿駅東口を経由 徒歩 12分

## 日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て、日本とフランスの工業技術の紹介・普及、および両国の技術者の交流を促進することを目的として、1955年（昭和30年）に発足しました。両国と深い関係にある会社、研究所、内外の最新知識を求められる技術者、研究者、学生を会員とし、(公財)日仏会館傘下の学会の一つとして、様々な有益で最新の情報を会員の皆様に提供しています。

年二回配布する『日仏工業技術』は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「海からの贈り物」、「未来のプラスチック」、「iの時代、cの文化—情報通信に未来を探る—」、「色」、「からだの材料」、「原子力が繋ぐ日本とフランス」、「災害と国土」、「日仏の女性研究者たち」、「駅舎と高速鉄道」など、様々な切り口での特集を組み、底流に流れる文化の差異なども併せて紹介しています。昨年からは、若手研究者によるフリーペーパー『L'Echange』も発行し、旬なフランスの情報も提供しています。

また毎年、在日フランス商工会議所の会員とともに、金沢文庫、曹洞宗大本山総持寺、鶴岡八幡宮、江戸東京たてもの園などの日本の文化に触れながら、味の素(株)、三菱重工業(株)、(株)資生堂鎌倉工場&研究所、(独)日本原子力研究開発機構・東海村「J-PARCセンター」、住友電工(株)横浜製作所、(財)鉄道総合技術研究所などの日本の誇る先端技術を見学しています。

さらに、日仏フォーラムとして、『日仏都市会議』、『日仏鉄道技術シンポジウム』、『日仏情報通信フォーラム』、『日仏環境会議2008—都市生活と環境—』、『日仏原子力フォーラム—過去・現在・未来—』、『日仏水フォーラム』を開催し、日仏、日欧の情報の懸け橋となって活動を展開しています。

皆様に是非、ご入会いただき、ご一緒に活動できますよう、よろしく願い申し上げます。

日仏工業技術会会長 高橋 裕



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、今月号の会誌の表紙

## 入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員 (5 千円/年) 学生会員 (2 千円/年) (○で囲んでください) (いずれも入会金は無)
氏名	ふりがな： 漢字表記： 印 英語表記：
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 (部署・学科まで)	
勤務先住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
自宅住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 (○で囲んでください)
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会  
TEL : 03-5424-1146 FAX : 03-5424-1147 e-mail:sfjti@t3.rim.or.jp  
振込先：みずほ銀行 恵比寿支店恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506  
三井住友銀行 神田支店 普通 0952122